

衣食住遊

第七回

酒に礼あり

文神崎 宣武

Kanzaki Noriaki

かんざきのりたけ／民俗学者「旅の文化研究所」所長。郷里の岡山県では宇佐八幡神社宮司を務める。「酒の日本文化」(角川ソフィア文庫)、「三三九度」(日本の契約の民俗誌) (岩波書店)、「江戸の旅文化」(岩波新書)、「まつり」の食文化「角川選書」など著書多数。

「御神酒あがらぬ神はなし」という。

古く、酒は、まつりにあわせて仕込むものであった。そして、「この御酒は わが御酒ならず 大和なす 大物主の醸し神酒」(*)と、崇神天皇の代(4世紀ごろ)に掌酒の活日がうたつたように、酒造りそのものが、神がとりもつものであった。

現在も、神まつりに、酒は欠かせない。神饌では、最上位にそれが供えられる。

まつりのひとつの意義は、神人共食(共飲)にある。その代表的な礼席が直会である。直会は、楽座になつての酒宴(無礼講)ではない。こ

こまでは、あくまでも儀礼(礼講)なのだ。そこに、酒が深く介在するのである。直会の顕著な伝承例は、神社での祭典の直後に行なわれるそれである。神酒を下して頭屋(当屋)や総代などの参列者がいただく。神々が召しあがった酒を人びとが相伴すること、「おかげ」が分配されたとするのである。直会での作法は、必ずしも統一されていない。が、正式なかたちは、「式三献」(式献)にある。原則は酒一盃と肴一品、これが一献である。これを三度とりかえて供するのが式三献である。神人のあいだだけでなく、人と人とのあいだの契約儀礼としても広まった。神聖なる酒を肴で口をあらためながら三度も念を入れて丁寧に飲み干すことで、互いにある約束を固めたとするのである。



一献 打鯨



二献 かち栗



三献 昆布

儀礼、といえるのである。

現代では、そうした式献・直会・盃事、つまり礼講は、後退したかのようにみえる。が、たとえば、かつての式献における酒と肴の献立の習俗は、現代にも伝わる。居酒屋で酒を注文すると、頼まないのに先付け(お通し、おつまみ)なる一品がでてくるではないか。その代金を請求されたとしても、それに異議を唱える人もいないだろう。そして、遅れてきた人には「駆けつけ三杯」。これも、まずは三献をすませなくては、といいかえることができる。不断の文化伝承というしかあるまい。

ならば、大事にしよう。三献とまではいわない。せめて、はじめの一献は肅々と日本酒で。礼講を忘れて無礼講だけの日本人、にはなりたくないものである。

(*)『日本書紀』崇神天皇8年12月条の15歌